
プリンセス・エキストラ

八木ねずみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プリンセス・エキストラ

【Nコード】

N6942V

【作者名】

八木ねずみ

【あらすじ】

来世というものがあるそうです。私の来世は、可哀相な皇女様なのだそうです。戦争で婚約者を失い、悲しむ間もなく求婚者が現れ、その求婚者が3人もいて、それがまた蛮国の王子、婚約者の仇、魔族という最悪の顔ぶれであったという、可哀相な皇女様。結婚を嫌がって大陸外に逃亡するのは仕方ない話です。因果応報、前世の私が責任を取って身代わりを務めることになりました。……不幸な皇女様には悪いのですが私としては大変ラッキー。身代わりをやり切って、必ず報酬を手に入れます！

序

大事な用がある、と言われて手を引かれた。

見栄を何より大事にしている、表情を曇らせることさえ嫌う男が、必死な表情で「頼む」。

断ることなんて出来ずに、菊は手を引かれるまま、彼の後に付いていった。付いて行ってしまったのである。

（せめて用件を聞くべきだった……）

後悔しても遅い。

男が菊を連れてきたのは、国の、最高権力者の前だった。グレナ皇国においては正皇と呼ばれる。正皇の横には宰相。宰相の向かい側には魔術大師、その隣には青鬼、もとい大師補佐……。

黒幕揃い踏みの状態だ。

この面々を前にして、男は言った。

「この娘を国に連れ帰りたい」

空気が凍り付いたような気がした。

実際、凍っていたとしてもおかしくはない。魔方陣も呪文も必要とせず、感情一つで精霊を動かせる男が、絶対零度の視線を菊に向けている。

私の意思ではありませんよ、と菊は首を振ってみせる。が、南極の氷にぬるま湯をかけるようなものだった。青鬼の凍てついた視線は僅かなりとも解けてくれない。

彼の気持ちも分からないではない。

何から何まで悪すぎるのだ。

ひとつ、菊が訳あって喚ばれた異世界人であること。

ひとつ、男がこの国の皇女の嫁ぐべき相手であること。

ひとつ、菊の喚ばれた訳というのが、結婚を嫌がって逃亡した皇女の影武者を務めるためであるということ。

ひとつ、男が「連れ帰りたい」と言うのは、皇女の影武者ではなく、すっかり変装を解いた素の菊であるということ……。

（一体どうして、こうなってしまったのか）

菊はそつと目を瞑る。

男の用件を聞かなかったことを始め、理由はいくらでも思いつく。後で深く反省するべきだろう。しかし今は、とりあえず。

「キク！」

自然に見えるよう精一杯に心掛けて、菊は床に倒れ込んだ。

異世界初日

日誌とプリントを纏めて差し出す。

恐らくは次の授業で使う資料だろう。年号とカタカナの踊る紙面から顔を上げ、担任が日誌とプリントを受け取った。

「おお、ご苦労さ……ん？」

眼鏡のつるをクイと持ち上げ、日誌と菊とに視線を行き来させる。

「今日の日直はお前さんじゃないだろう」

「大会までもう日がありませんから、私が引き受けました」

今日の日直は二人ともが運動部に所属していた。練習の疲れが溜まっているのか、二人ともが休み時間を寝倒し、放課後に突入してから「部長に殺される！」と悲鳴を上げながらアンケートの集計作業。

代わりましょうか、と声をかけたら、高校2年にもなる男子が2人揃って泣きながら「委員長ありがとう！」と感謝した。

「委員長、甘やかすのはよくないぞ」

口をちよつと尖らせた担任の言葉に、

「恩を売ったんです、先生。大会が終わってから返して貰う予定です」

と、菊は笑って返した。

見た目の厳つい男教師が口を尖らせるのが可笑しかったこともあるし、教師までもが菊を「委員長」呼ばわりするのが可笑しかったせいでもある。

菊が何かの委員長を務めたのは小学校6年生と中学3年生時の2回で、高校2年の今現在は美化委員会所属の、ヒラの委員だった。

菊の「世話焼きですよ」というオーラは教師にまで影響しているらしい。手間の掛かる弟2人と病弱な妹を持った菊の世話焼きオーラは筋金入りだ。

「それなら良いが。もし踏み倒されたら報告に来るんだぞ」
「はい、よろしく願います」

ペコリと頭を下げて教務室を出る。時計を見ると、5時になろうかというところだった。

書店に寄る予定だったが、真っ直ぐ帰るのが無難な時間だろう。冷蔵庫の中にある食材を思い浮かべ、今晚の献立を思案する。賞味期限が危ないのは、トウフとあぶらげ、ひき肉。

「トウフとあぶらげのどちらを明日に回そうかな。どちらも危ないんだけど……。あぶらげを冷凍しなかったことが悔やまれるなあ」

一日二日、賞味期限が過ぎたところで菊と弟2人はどうってことないが、桔梗の体は不安だった。

母の体質をそっくり受け継いってしまった桔梗は、何かあると直ぐに体調を崩してしまう。

思案の末、菊はトウフとあぶらげの両方を使うことにした。大豆食品を2つ使用したとて、文句を言うような人間は源家にはいない。菊の小さな美学に反すると言うだけ。

メニューはサラダと麻婆豆腐と袋煮。……となると、卵が必要なのでスーパ―に寄らなければ。菊は帰路から外れ、卵の安いスーパ―へ足を向け、

「え」

深紅の床を踏んだ。

■ □ ■ □

景色は、一瞬で変化した。

一瞬前まで菊の視界に映っていたのは夕焼けに照らされたアスファルト、民家の塀、電信柱、路肩に止められた車などであった。それが、どうだ。

地面はアスファルトから深紅の床に変わっている。ただ赤いだけではなく、黒い塗料で、何らかの意図、規則性を感じさせる模様を描いた床だった。

顔を上げると、男が2人。

1人は洪面だった。苦虫を噛み潰したよう、という表現がピッタリ当てはまる表情をしている。

もう1人は、男と言うより老人と言った方が良さそうな年頃に見えた。老人は菊と目が合うやいなや、皮が伸びて重たげな瞼をグワツと持ち上げ、

「ひ、姫様アアアアア、勘弁して下さいええええ」

と、泣き崩れた。

洪面の男はくずおれた老人の隣に膝を突き、おざなりにその背を撫でる。

「師よ、落ちついて下さい」

「これが落ちついていられるか！」

「心が乱れても仕方のない事態ではありません。しかしそれは、乱心すべき事態と同一ではありません。心を落ち着けるべきです、

師よ。師の本懐とは異なるのでしょうか」

「それが分かつておるなら黙って嘆かせんか！」

「……」

男は心底嫌そうに口を歪めて溜息を吐いた。

老人はフンと鼻を鳴らしてまた泣き出す。

（ええと）

目に映っていたものが何もかも変化してしまった驚き、未知のものに対する恐怖。他人が同様の状況に陥った時に感じるだろうものを、菊もしっかり感じていた。が、驚愕に狼狽えたり、恐怖に悲鳴を上げる前に、老人が泣き出してしまった。

もうやだ！ とばかりにわんわん泣いている老人と渋面の男のやりとりを見ている内に、菊の心は風いってしまったのである。

びっくり仰天の事態に心臓は忙しく動き、顔だって火照っているけれど、頭は冷静だった。

周囲を見回し、2人へ視線を戻す。

薄暗い部屋だった。扉は一力所で、内側から錠が落ちているのが見て取れる。窓は恐らく、1つ。えんじ色のカーテンの向こう側にあるのは窓だと思われるが、カーテンが隙間なく閉じられているので断定は出来ない。壁は書架になっており、びっしりと本が並んでいた。

夕焼けに照らされた道路からこの場所へ、一瞬で移動できる手段が日本にはあるだろうか？

否、である。

日本以外の国にだって、そんな技術はないだろう。もしかしたらどこかの国で開発されているのかもしれないが、菊とは無縁。

つまりここは菊の知らない世界。

なんて、順繰りに考えて見るまでもなく、菊は自分が普通じゃない

い事態に陥っていると分かってた。実際に経験してしまったのだ。他者を説得しているわけでなし、他に理由は要らなかった。

渋面の男の髪が青い。菊の知り合いに一時髪を青く染めた者がいたが、男の青髪は、友人のそれとは比べものにならない鮮やかさである。

因みに、衣装は近世ヨーロッパ、ロココ調のものに近い。ただし色は黒で、ボタンは紐ボタン、履いているのは踝まで隠れるズボンだった。

（来てしまったものは仕方がない。それより今、考えなければいけないことは）

夕食の支度をする時間になっても戻ってこない姉を弟妹達はどれだけ心配するだろう。

連絡のないまま夕食まで帰らなかったら、弟妹達は父に連絡する。母の耳にも入る。

元気の有り余っている弟達だが、これは体に限った話で、メンタルは繊細だ。桔梗は心身共にか弱い。父は心配性で、母は。背中を冷や汗が流れる。

問題は、帰れるか否かだ。

菊を連れてきたのは目の前の2人と考えて良いだろう。だのに、2人は菊を蚊帳の外に置いている。これは一体どういうことか？

判断材料が少なく、現状を上手く整理出来ない。

菊は自分の置かれている状況を把握するために、注意深く2人の会話に耳を傾けた。その一方で、彼らの出方によつては——菊に害を及ぼそうとするなら逃げなければいけないから、逃走経路を探る。

（鍵の掛かった扉から逃げるのは無理。となると、窓から逃げるし

かない……けども。ここが何階か分ければ良かったんだけど)

後先考えずに窓を突き破るわけにはいかなかった。

2階。2階くらいの高さまでならば、窓から逃げよう、と菊は思う。しかし、えんじ色のカーテンが邪魔で、この部屋が何階にあるのか判断できない。

(だめ、分からない)

渋々カーテンから視線を外す。
と、

「あ」

これはまずい。渋面の男と目があつた。

魔術師の事情

頭のとっぺんから爪先までを2往復。それから男の視線は右へ逸れ、左に動いた。

じつくりじつくり、何かを見定めるような視線だった。特に、足下は念入りに観察された。あまりに男が熱心だから、つられて菊の視線も床に、

「いけない」

落とそうとしたところで、制止された。

渋い顔をした男が、もつと渋い顔で菊を見ていた。眉、鼻、口。顔の内、動かせるパーツが全て真ん中に寄ってアスタリスクマークを作っていた。苦虫を粉々に噛み砕いてもこんな顔にはならないだろう。

「刺激すると一層騒ぎが大きくなる」

言って、男はこめかみを押さえた。

「魔方陣を注視してはいけない。説明を。直ぐにも説明の場を設けるゆえ、少し……」

そしてうずくまる。

咄嗟に菊は駆け寄りかけたが、男がチツ！と舌打ちしたので思い止まる。

男はブツブツと小さな声で悪態を吐いていた。「いい加減にしろ」「貴様等が騒いだところでどうなる」「黙れ黙れ黙れ」。菊に向け

て言っているわけではない……よう……なので……菊はそつと視線を逸らした。

これで、老人と男の二人が座り込んだことになる。ぽつんと1人取り残されたような気持ちになり、菊の心に不安が生まれた。それは先程まであった不安とは異なっており、

（大丈夫なのかな）

という、なりゆきの情けなさに対する不安だった。

「あの」

このままではらちが開かない。

そう感じた菊は、老人に話しかけた。

悪い癖だ。

進行の遅いイベント、まごついている人間を見ると、つい手を出してしまう。弟妹達の面倒を見ているうちについた癖。弟妹達がやるより、菊がやった方が早い。だから菊がやる。……悪い子育ての見本である。大人が相手ならば世話焼きと呼ばれ、やり過ぎればでしゃばりと呼ばれる。時に要らない面倒を抱えることになり、失敗すれば「口だけだ」と言われるようになる。

菊のあだ名が「委員長」なのは、ケースバイケースであることを早々に学んだからだだった。

が、この場は悪い癖を押さえられなかった。早く帰らなければ、という気持が先立った。

「何か訳があつて私を呼んだんですよね？ 理由を教えて貰えませ

んか。私にもこの後、予定があるので長居は出来ません」

男は老人を「師」と呼んでいたから、老人の方がきつと、立場が上だ。

「なんと」

顔を上げた老人が目を瞪る。

「これ、イフ。イフや、今のお言葉を聞いたか」

うずくまった男が呻き声を上げながら顔を上げる。相変わらずの渋面だ。

「……師よ。一刻も早く場所を替えねばなりません。ここはもう限界です。頭が割れそうだ……」

最後の言葉は独り言に近かった。

イフの言葉に、老人の表情はみるみる、

「ほう！ 因果律を乱す禁呪のわりに容易いと思っていたが、反動の方に問題があったのじゃな」

明るくなり、パツと立ち上がった。

スイッチで仕様を切り替えたかのような機敏さで辺りを見回す老人に、菊は「え」となる。

「なるほどなるほど、世界の方に負担がかかるわけじゃな。禁呪の反動ともなれば、さぞ珍しい影響が出ているに違いないのう。……調べたいのう」

「師よ」

「調べたい」

男の周囲を取り巻く空気が、ズン、と重くなったような気が、

「わしゃこの部屋に残る」

した。

■
□ ■
□

男はイフ・ヘイルウッドと名乗った。

老人の名前はユーリー・ノーリス。双方とも魔術師で、ユーリー老人はイフの師だ。そして菊の召喚における責任者であり、国事に携わる重臣でもあるという。

あれで？

と、思いはしても口にしなかった。

ユーリー老人は「全権を譲る」とイフに宣言したあと、喜々として魔方阵の検証に入った。

多分、ユーリー老人は重臣である前に研究者なのだろう。菊の高校にも彼のような教師がいた。よれよれの白衣を着た化学の教師で、授業はしょっちゅう脱線した。キラキラした目で分子について語る姿に、「子供のまま外見だけ大人になったんだな」なんて思ったものである。しわ寄せが来たのは勿論、生徒だ。

「師に代わって謝罪しよう。貴方への説明は速やかになされるべきだった」

ユーリー老人のしわ寄せがいつているのはこの男だろう。

うずくまり、独り言——悪態——を言っていた姿を思い出す。凄まじいストレスを抱えているのは容易に知れた。ユーリー老人の哀れな部下を相手に「許せない！」とは言えない。

部屋を移って、彼について分かったことがいくつかある。魔方陣のある部屋を出るまでは終始顰めっ面で気付かなかったが、イフは非常に整った容貌をしていた。細面に、西洋人形みたく上品な顔立ち。青という髪の色もあり、明るいところで見た最初の一瞬は「つくりものみたいだ」と思った。

本当に、一瞬だけ。彼は、つくりものにしては凄みがあり過ぎたのだ。

どれだけ上司に苦勞させられているのか、イフの目の下には濃い隈があり、頬は瘦け、顎は細かった。しかし弱々しさは感じない。か細さを鋭さと思わせる硬質さが、彼の眼光にあった。

イフは部屋の扉へ嚴重に鍵をかけ、さらに、扉へ奇妙な模様を描き込んだ。模様の意味は分からないが、部屋の中がしんと静まり返った——いや、外の音が遠ざかったのは分かった。

「これから話を聞けるんですね？」

「師は全権を私に任せると言ったが、この決定は師の一存では出来ない。ゆえに、決定を下せる方の判断を仰いでいる。しかし、事態の説明は師の許可があれば私の口からなされても問題はない。師の許可は下りたものと考えて良からう。貴方に異存がなければ、私から説明する」

（この人の性格であのおじいさんに付き合うのは、大変だろうなあ）

ユーリー老人に付き合った結果、こんな性格になったのかもしれないが。

イフに心底同情しながら、菊は「お願いします」と説明を求めた。

「少々長い話になるが、時系列を追って説明した方が理解しやすいだろう。……地図も必要か」

イフは部屋にあった机から紙を取り出すと、そこに図形を書き出した。さっきの部屋、深紅の床に描かれていたものや、扉に描いたものとは違う。

（これ、地図だ）

うわぁ、と思わず声が漏れた。

連続した入り江、半島、三角州。イフの描いた地図は、手書きとは思えない緻密さだった。

だからとてもよく分かる。

もう間違いないな、とは思っていたが、改めて。

異世界である。

魔族来る

長い話になる、と前置かれただけのことはあった。

「文献によつて多少の差違はあるが、最も信憑性における書物で、1238年前」

地図を書き出しながらイフが言う。

……話は、1238年前に遡ることから始まったのだ。



イフの話を短くまとめると、こうだ。

信憑性における文献によれば、1238年前。大体で言えば1200年前に、ティタンという国が興った。

滅んだのが700年前。疫病の蔓延と、これに乗じた侵略による。国としてのティタンは滅んだが、ティタンを征服した国は勿論、かつてティタンの属国であった国や近隣諸国に文化が残り、ティタン王家の血も隣国に残った。

グレナ皇国。

ティタン最後の王女が嫁いだ国の名で、ティタンよりもさらに古い歴史を持つ国であり、

「この国の名でもある」

菊を召喚した国だ。

「幸いの国グレナと呼ぶ者も多い。災いから最も遠い地、永遠を約束された楽土……統治行為の苦渋を知らない人間の言葉だ。幸いを約束された国が、因果律を乱す禁呪を使うものか」

煩わしげに手を振って、イフは溜息を吐いた。

「話を戻そう。かつてあったティタンのことを、グレナでは古ティタンと呼んでいる」

「ということは、新ティタンもあるんですか？」

「その通り。古ティタンに対し、新ティタンと呼ばれる国がある。正式な名前は正統ティタン帝国」

「……わざわざ正統を名乗るっていうことは」

「貴方は回転が速いようだ。そう、正統があれば、傍系があり、異端がある。最も、傍系ティタンや異端ティタンと名乗った国はない。古ティタンを滅ぼした国、古ティタンの属国であった国、古ティタンであった領土に立った国はあるが」

イフが白地図に線を引く。

「グレナ皇国はここ。左の国をユーグラッド神聖国と言い、その隣にあるのが正統ティタン」

三国とも海に面している。特にユーグラッド神聖国は、海岸沿いに広がった国だ。グレナも海に面しているがその面積は狭く、国土は大陸の奥へと広がっていた。

イフが地図に文字を書き込む。不思議と言葉は理解することが出来たが、文字を読むことは出来ない。

そのことをイフに伝えると、「まだ影響が少ないのだろう」とい

う答えが返ってきた。

「影響？」

何のだ。

……ユーリー老人の姿が脳裏を過ぎる。禁呪の反動、世界への影響について調べるために、部屋に残った老人。

「禁呪の影響ですか」

ろくなものではない、予感がする。

「違う。殿下の……いや、最後まで説明してからの方が分かりやすい。貴方が直ぐに聞きたいと言うのであれば、影響について先に話すが。貴方に害を及ぼすものではない」

「それなら、説明の続きをお願いします。話を止めてすみません」

ついさつき出会ったばかりのイフであるが、彼の言うことは信じられる気がした。眉根に寄る皺の深さは浅くなったものの、相変わらずの渋面。しかし彼は明らかに、菊を尊重してくれている。

……相手がユーリー老人の言葉であつたなら、直ぐにも詳しい説明を求めただろう。

「貴方を喚ぶことになった要因はいくつかあるが、その1つに、ユーグランド神聖国の敗戦がある。相手は、正統ティタン」

地図へさらに線を書き込む。今度の線は、正統ティタンの左端から延びて、ユーグランド神聖国の殆どを覆った。そして書かれた文字は……共通部分があるから直ぐに分かった。

古ティタン。

「あ！」

閃く。

古ティタンの説明で、イフは言っていた。ティタン王家の血は『隣国』に残った。そしてそれはこの国、グレナ皇国だ。つまり、ユーグラッド神聖国はかつてティタンであつた土地に出来た国である。正統があれば、傍系や異端がある。正統ティタンにとって、神聖ユーグラッドはまさにそれだ。

言つと、イフは「その通り」と頷いた。

しかしこれが、どう、菊の召喚に繋がるのだろうか？

「この戦争で、ユーグラッド神聖国の第2王子が命を落とした。貴方の召喚に関係しているのは彼の死だ。彼は、グレナ皇女と婚約していた。皇女の御名は……」

「エステル」

エステル・ゲートルー・グレナ。

イフが名前を口にする前に、菊の頭に皇女の名前が浮かんた。

しかもそれはごくごく自然に声に出ていて、「あれっ」と思うのが最後だった。

（え、なんで？）

疑問。

しかしこの疑問を追求することはなかった。出来なかった。

パリン、とガラスが割れるような澄んだ音が響き、菊の思考を遮ったのだ。

反射的に、音のした方へ顔を向ける。
するとそこには、

「エステル、見つけた！」

顔の上半分、目を覆うように黒い布を巻いた少年が立っていた。
目が見えずとも、彼が笑っていることは分かる。満面の笑みだ。
濡れたように赤い唇の端が、綺麗に持ち上がっている。

「会いたかったよ、エステル」

彼は諸手を広げて歩み寄る。
エステル、と嬉しげに言いながら、菊へと。

あなた達と私の理由

少年の後ろでは扉が割れている。

イフが描いた模様を真ん中から割るようにして、厚みのある扉が、真つ二つに。

ガラスの割れるような音だった。

あの澄んだ音は、木製の扉が割れる音だったのだ。

呆気にとられる菊の体をイフが押す。

部屋に踏み行った少年から距離を取るように、ぐいぐい部屋の奥へ押される。菊は彼に従った。目元を隠した少年の登場は、どう見ても普通じゃなかった。

「あれえ」

少年の足が止まる。

白々とした手を持ち上げ、宙を叩く。すると、カツン、と音がした。……硬質な何かを叩いたような、そう、ガラス窓を叩いたような音だった。

多分、イフは扉に描いた模様によって、部屋に細工を施したのだと思う。

音が漏れないようにするとか、他人が入って来られないようにするとかいったものを。

少年は、それを破って押し入ってきた。

そしてまた、足止めを壊そうとしている。

見えない壁に触れる指へ、力を込めたのが分かった。ピシリ、とヒビの入る音がする。

得体の知れないものを前にして、体が竦んだ。
彼は一体何者なのだろう。

怖いと感じ始めているのに、何故か目が逸らせな――。

「っ」

グラリとイフの体が傾ぐ。

目の端にそれをとらえて、菊は反射的に手を伸ばした。額に脂汗が滲み、顔色が青白く、意識が……ない。

力なく寄りかかった体を、菊は両手で支えた。

……源家の家事を取り仕切る菊は腕力に自信があった。カゴいっぱい濡れた洗濯物と、病的に細いイフとでは、前者の方が重い気がした。

訂正。

洗濯物よりもずっとずつと重量があった。

針金のように細いくせに、イフの体はとても重い。

「イ、イフ、さん！」

意識のないイフを、菊では支え切れない。

ばしばしばし、と容赦なく背中を叩く。

体が身動き、イフが正気付いたのが分かった。

「黙れ黙れ黙れ失せろ失せろ失せろ」

……正気かどうかは分からないが意識は戻ったようだ。

「イフさ」

「ご迷惑をおかけして申し訳ありません、殿下」

菊の言葉を遮って言う。

そして体勢を整え、指を1本、口の前に持ってきた。強い視線で菊を見る。

「静かに」

と、という意味だと、思う。菊は頷く。

彼は菊に向かって「殿下」と言った。けれどそのことに、今は触れるべきじゃない。……触れるべきじゃない？

委員長、班長、パトリダー！。役割分担の際には必ずと言っていいくらい、取り纏め役をやってきた菊だ。察しは悪くない。

菊の召喚にはグレナ皇女、エステルが関わっている。

菊を「エステル」と呼ぶ人間がいる。

イフは菊に向かって「殿下」と言った。

殿下とは、王族や皇族に使う敬称だ。例えば、皇女とか。

（私がこの世界に喚ばれた理由って）

予想通りならば困ったことになる。

直ぐに済む用件だとは到底思えない。

エステル皇女を知っていることを利用して、直ぐさま自身を用済みにすることも出来る。菊を庇うようにして立つイフの背中を見ると心苦しいが、家族に心配をかける訳には……そう、心配をかけるわけにはいかない。

「バフィット卿、ここがどこかお忘れか」

「あれえ、もしかして、イフ？ 誰かと思った。魂が掠れてて分か

らなかったよ。どうしたの、それ。そのまま放っておくと死ぬよ」

「執務で3日寝ていませんで。それよりバフィット卿、私の質問に答えて頂けますか。ここがどこか、お忘れのように見える」

「もう忘れないよ、イフがうるさいもの。グレナ皇国の皇宮でしょ」

「そう。では、皇宮には自由に入り出来ない場所がある、ということは？　ここは人の世で、人の理がある。人を欲しがるならば人の理を守らねばならない。これは神の定めた法だ」

「イフうるさい」

「ルールを守って頂ければ私が卿のすることに口出しをすることはありません」

「だってエステルに会いたかったんだ。僕がどれだけ、エステルに会ったのを我慢させられたと思ってるの」

「近く、機会を作ることになっていた筈ですが」

「それってどれくらい？　約束した次の瞬間も、今も、一年後も「近く」だ」

「少なくとも今ではない」

「残念。もう会った」

あはははは、と朗らかに笑い、バフィットはイフの体を押し退けた。……押し退けたのだ！　菊の胸にも届かない小柄な少年が、大人の男を軽々と。

イフとバフィットの会話から、彼が危険な人物ではないことが知れる。けれど、注意の必要な相手ではあるようだ。得体が知れない、という気持ちは拭えない。

「エステル、会いたかった」

気になること。

この少年は、どうして、目隠しをしているのに菊とエステルを問

違うことが出来るのか？

似ているのは声なのだろうか。

いいや、彼が部屋に入って「エステル」と呼んだ時、菊は声を出してはいなかった。

他にも不思議なことはある。姿が見えていないのに、彼は菊の居場所をきちんと把握しているのだ。

「バフィット卿！」

押し退けられたイフが、鋭い声で少年を呼ぶ。

バフィットに「人違いですよ」と教えることは容易い。そうすれば、多分、菊はお役御免になる。上手くすれば家に帰れる。

（上手くすればって、具体的にはどうするの？）

駄目だ。菊は首を横に振る。家には帰りたいが、危ない橋を思い付きで渡る訳にはいかなかった。橋が落ちれば、帰るのが遅くなるくらいじゃ済まない。取り返しの付かないことになる。

彼らは訳があつて菊を喚んだ。理由を……まず、話を最後まで聞こう。どんな話し合いでも共通することがある。相手の話を聞かなければ、自分の話も聞いて貰えない、と言うこと。

と、なれば、まずはバフィットに退出して貰う必要がある。彼がいる内は、話をすることが出来ない。

「イフ」

さん、とは呼ばない。

エステルはいるのだと、ここにいるのは皇女だと勘違いしたまま、

退出して貰うのだ。

「これはどういうこと？ 聞いて、いないわ」

演劇に携わったことはないが、人の前で話すことには慣れている。当たり前障りのない言葉選びもお手の物だ。

だから大丈夫——と自分に言い聞かせ、菊は、緊張する体に「動け」と命令した。

身を引き、バフィットから離れ、イフの背後に回る。

菊がエステルについて知っていることは、婚約者を戦争で失ったということだけ。エステルの振りをするには情報が足りない。

彼女はどんな状況だったのか、

バフィットとはどんな関係にあったのか。

「イフ、答えて」

「……申し訳ありません、殿下。療養から戻ったばかりの殿下には、まだ、お聞かせするべきではないと師が判断したのです」
「話して」

イフの眉間に皺が寄る。

彼が再び口を開くまでには、少し時間がかかった。

「殿下は覚えていらつしやるでしょうか。9年前、殿下に1人、求婚を求めた……魔族がいたことを。殿下には既に婚約者がいたため、陛下はこの求婚を断り、殿下に魔族の名前を教えることもなかった」
「はいはい、僕だよ」

横から回り込み、片手を挙げてバフィットが言う。

幼い声、幼い姿だ。12、3にしか見えない。けれどイフは9年

前と言っていたから、魔族は外見と精神年齢にズレがあるのだろう。
いよいよファンタジーだ。

最近呼んだ児童文学が頭を過ぎる。杖に箒、妖精と使い魔、賢者の石やら……。

はた、と菊の中で時間が止まる。

（賢者の石……不老不死！）

バフィトへの畏れも、演技への緊張も、体の中から全て綺麗に消え去った。

ファンタジーでお決まりのアイテムだ。

魔術があつて、魔族がいる世界ならば、ひょっとしたら実在しているかもしれない。

（賢者の石なんて、大層なものでもなくても良い）

体のつくりや体力を無視して、どこからともなく生気を与えてくれるような、不思議な薬であれば良い。

（聞きたい、今すぐに。そんな薬があるのかどうか……！）

胸の中で心臓が飛び跳ねる。

この世界に召喚された直後よりもずっと、今の方が興奮していた。

聞きたい。

聞きたい、聞きたい、聞きたい。

「僕ねえ、ずっと待ってたんだ。エステル婚約者がいなくなるのを。これでもう、エステルが約束してる人間はいなくなっただよ。僕ね……」

「バフィット卿。私の話がまだ終わっていません」

「イフの話は長いよ。僕はエステルと話したい。エステルと遊びたい。エステルと一緒にいたいんだ」

聞きたい！

菊はイフの前に進み出た。

つまり、バフィットの眼前へ。

高揚して体は軽く、意識せずとも口の端が持ち上がった。

「バフィットさま」

名前を呼ぶと、柔らかい金髪に縁取られた白い顔に喜色が浮かぶ。イフの話を聞く限り、エステルと彼の間交流があつたようには思えない。親しかったなら、イフは説明の間にそれとなく教えてくれた筈だ。交流はない。でもバフィットは、エステル皇女が好き。

だったら、イフの説得よりもずっと、菊の願いを聞いてくれる可能性の方が高い。

「私がない間に、皇宮では何か大事があつた様子。私はイフから話を聞かなければいけません。バフィット様とお話するよりも先に」

「エステルも僕に待てて言うの？ 近く？ 直ぐに？ 明日？

明後日？」

「いいえ」

彼の年齢は見た目よりも上。けれど言動の方は見た目と合致していた。意識してやっているのか、無意識のことなのか分からないが、子供みtaiであることは間違いない。

ならば、ゲーム性を持たせてやれば、意に沿わぬ提案でも乗り気になるに違いない。

子供は遊ぶことが好き。「先に終わった方が勝ち」とさえ言えば、雑巾がけでも窓ふきでも、弟たちは先を争ってやってくれた。

「私がこれからなぞなぞを出します。答えが分かるまでは、待っていて下さい。答えが分かったら、お茶を一緒に一緒にします」

「直ぐに答えが分かったら、直ぐにお茶にするの？」

「ええ、そうです」

イフが「殿下」と焦った声を出す。

込み入った事情を話すのに、「直ぐ」では困ると思ったのかも知れない。彼らが菊を召喚した理由が菊の考える通りなら、色々と準備も必要だ。

申し訳ないが、菊は自分の気持ちを優先した。

今すぐ聞きたいことがある。

それはちよつとの時間で十分だった。

「……面白そう」

「私の提案に乗って下さいますか？ バファイト様」

「うん、良いよ。なぞなぞを出して、エステル」

「では」

病院のベッドで暇を持て余していた妹へしたように、指を1本、菊とバファイトの間に持ってくる。

「この広い世界のあらゆるものの中で、いちばん長くていちばん短

いもの。

いちばんはやくていちばん遅いもの。

いくつにでも細かく分けられて、どんなにも大きくひきのばせる。

いちばん無視されていちばん悔やまれて、それなしには何もできぬもの、なーんだ？」

過不足のある経験値

菊の時間稼ぎは成功した。

首を捻るバフィトを置いて部屋を出る。バフィトが付いてこないのを確認して、菊はイフに尋ねた。

「イフさん、私聞きたいことがあるんです」

気持ちがはやる。部屋を替える時間さえ待てない。どうしても知りたい、直ぐ知りたい。

この世界は、問答無用で体を癒す、反則じみた薬は存在しているのか。

もしもそんな薬があるのなら。
手に入れることが出来るなら。

■
□ ■
□

源家の女は体が弱い。

誰に教えられたわけでもないが、中学校に入ることには知っていた。気付いていた。

体の弱い母と妹。菊が生まれた時にはもう、祖母は亡くなっていた。そして菊も、幼い頃は体が弱かった。

双子の弟達が生まれるまでは大人しくしていることがちっとも苦ではなかったが、元気いっぱいの彼等を見ると、菊も外で遊びたく

なった。

日向にずっといてはだめ。走り回ってはだめ。

母の言いつけを破って外で思うさま遊び、菊はその夜、高熱を出して寝込んでしまった。

看病をしたのは母だ。

菊の具合がよくなると、入れ替わりで母が寝込んだ。ごめんなさいね、と母が謝って、菊は泣いた。自分が悪いのだと言うことは分かったが、何故母が謝るのかは分からなかった。分からないけれど、泣きたくなくなるくらい悲しかった。

母の体調は戻らず、暫くすると入院した。

菊が、感情に任せて、後先考えずに遊び回ったせい。

母の入院は悲しかったが、菊はなるべく明るく振るまつた。ここで自分が暗い顔をしていたら、弟達の顔がもっと暗くなってしまう。家の手伝いを進んでするようになったのはこの頃だ。ただし、無理はしない。無理をして体調を崩したらどうなるか、骨身に染みていた。

病院から家に戻った母は、手伝いを覚えた菊を一番に褒めてくれた。

流石お姉ちゃんね、ありがとう。

無理はしない。でも菊は、出来ることは精一杯に頑張った。

これが良かったのか、体が徐々に丈夫になっていく、小学校の中学年に上がる頃になると、他の子達と同じように遊べるまでになった。

妹が出来たのは小学校3年の秋。

妹はぎよつとするくらい小さくて、母は、病院から帰って来られ

ない。

「秋桐、今日友達とケンカしてたでしょ。駄目だよ、仲良くしないと」

「柊、廊下は歩かなきゃ。怪我してからじゃ遅いんだから」

元氣すぎる弟達の面倒を見るのは、菊の仕事だった。

擦り傷や切り傷、軽い打撲なら菊が手当をした。宿題をきちんとしているか、忘れ物はないか、余所ではお母さんがするようなことを、菊が一手に引き受けた。

掃除洗濯はおてのもの。

大人びるのが早いのは当然で、機転が利くから何かと頼りにされる。小学校6年生で整備委員長になった。以降「委員長」が菊のあだ名だ。

中学に入る前に、母と妹……桔梗が家に戻ってきた。

桔梗は小さくて。

小さくて、小さくて。切ないくらい小さくて。

子供だから桔梗はよく泣く。泣くと疲れる。疲れると、熱を出す。菊は桔梗が泣かないよう、色々なことに先回りするようになった。家に帰ると秋桐と柊が散らかしたオモチャが散乱していて、菊は2人を怒る前にまずオモチャを片付ける。2人が片付けるのを待っていたら、桔梗が転んで、泣いてしまいかもしれない。

桔梗を保育園に預けることについては、家族の中で意見が割れた。体が弱いから家で面倒を見るべきだ、という父派と、友達を作るために通うべきだ、という母派。

勝ったのは母だった。

桔梗は保育園に行くのが楽しみで、興奮して……寝込んだ。看病

をする菊に、桔梗はか細い声で言う。

「お姉ちゃんや、お兄ちゃんは、良いなあ」

菊も同じだ。

桔梗くらの頃は、菊の体も弱かった。

そう言ってしまうのは簡単だった。

だから桔梗、桔梗の体も強くなるよ。

そう言っただけやるのも簡単だった。

先回りすることに慣れた菊は、桔梗に、何も言うことが出来なかった。

その場しのぎの慰めで終わってしまった時に、桔梗は菊を――。



「ある」

詰め寄る菊に、イフが言う。

「不老不死を叶えた人間はいないが、命の期限を延ばすことに成功した人間はいる。万病を癒すと言われる薬もある」

それがどうかしたのか、と問うイフに菊はゆるゆると首を振った。

あるということさえ分かれば、今は、良い。

どこにあるのか、手に入れるためには何が必要なのか、尋ねたいことは山ほどあったし、尋ねたい気持ちも強かったが、菊は心に蓋をした。

感情に任せて、後先を考えずに走るのは、よくない。

今だって、菊が無理にバフィトを納得させて部屋から連れ出したから、イフの表情が厳しい。

「聞きたいことはそれだけか」

「はい。次はイフさんの話を聞かせて下さい」

「では言おう」

主導権を譲ると、イフは大きく息を吐き出し、

「何て無茶をする！」

菊を叱り付けた。

「あの男が魔族だと私は言った。それなのに取引を持ち出すなど！見た目は子供に見えるかもしれないが、バフィトと名乗る魔族がグレナに現れたのは132年前だ。3つの眼を持った鴉の大群を引き連れたバフィト、ワルカの街を呑む——神殿の記すところによれば、あの魔族はグレナへ頻繁に干渉している。ただの魔族であれば、魔界から出てくることさえ出来ないというのに。バフィトは間違いなく、力ある魔族だ。もしかしたら伯爵級の！」

剣幕に圧されて、菊は一步退いた。

謝れ。謝らなければ。そう思うが、怒鳴り声に体が萎縮している。委員長なんてあだ名が、教師にまで浸透している菊だ。面と向かって怒鳴られた経験は——ない。

ሆኖ ሲሆን

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6942v/>

プリンセス・エキストラ

2011年8月20日12時06分発行